

風景は記憶の順にできていく

表題は椎名誠さんの2013年7月出版の「集英社新書ノンフィクション」。名古屋市大病院での目の手術・入院のとき、本のタイトルに惹かれて読んだ。椎名誠さんとは、ずいぶん前にシンポジウム場で一緒にいたことがある。私の記憶が風景としてインプットされている。

表紙カバー裏から一著者は、自身の原点となった様々な「街」に再会する旅に出る。浦安、銀座、熱海、浅草、四万十川、石垣島の白保、銚子…。日本各地を巡る旅は、これまでの人生に堆積してきた記憶の断層を掘るかのようで、なつかしい風景に心震わせ、感無量となることもあれば、思いがけず困惑し落胆することもある。作家の原点となった街やいまだ昭和の空気をまとう町など、現在の風景の入り口に記憶をたどる。



この本のタイトル「風景は記憶の順にできていく」は、入院中ベッドの上で、ずっと天井を見上げながら考えていたことだ。先にレポートした、わが生誕のまち「千種本町1丁目」も、こんな幼い頃の風景から書いた。本書冒頭から。

遠い記憶は夢と同じようなものだ。なにもかもおぼろで曖昧な、静止画が少しずつ仕方なく連動していくような、いたって頼りないあわい風景がよく似ている。遠い記憶も、その朝見た夢も、どちらもやるせないモノクロームで投影される。

記憶は冷淡だ。あの波濤は夢と区別をつかないころもとなさで、ぼくの記憶の断層のずっと深いところにまだ堆積したままゆっくり逆まいている。人生が進んでいくにつれて、その上に容赦なくおびただしい数の騒々しい風景が蓄積し、おそらくとんでもない圧力をかけているのだろうに、小さい頃にぼくのなかに焼きついた弱々しくおぼろな記憶は意味とか理由とは無関係に生き続けている。

そんなふうなさして意味のあると思えない、数々の自分の人生のなかに堆積した記憶の断層を掘りこんでみるように、いま迎える場所を歩いてみた。風景が消えないうちに、風景の多くの断片が衰えないうちに、それを大急ぎで回収するような気持ちでランダムに歩いてみた。もしかするとそういうところを歩いていくことによって何か途方もないものを見つけることができるかもしれない、というささやかな胸さわぎみたいなものもあった。何も確信がないのとおなじくらい何も期待せずに、それぞれ短い時間、歩いてみた。思いがけない感慨のある風景と、落胆に近いような風景があった。それは予想されたことであり、どっちでもよかった。

ぼくはまだ、もう少し、人生のいろんな風景を見ていくことになるだろう。懐かしい風景をふりかえるよりも、数は少なくてもいいから、静かにこころ静まるまで眺めることができるようなやわらかい風景を見つけてみたい。

(2016年11月20日)